

指定都市教育研究所連盟

第19次共同研究 第2年次 (令和元年度)

年次報告書

(各章 観点のとらえ・調査の全体像・調査問題案)

目次

○指定都市教育研究所連盟 第19次共同研究全体計画	1
○令和元年度の活動概要及び令和2年度の見通し	3
○令和元年度(第2年次)共同研究担当者名簿	4
第1章 「家庭・地域社会における生活」 東ブロック	
・ 章の扉	5
・ 調査結果, 考察とまとめ	6
第2章 「家庭・地域社会における学習」 西ブロック	
・ 章の扉	20
・ 調査結果, 考察とまとめ	21
第3章 「学校における生活」 南ブロック	
・ 章の扉	36
・ 調査結果, 考察とまとめ	37
第4章 「学校における学習」 北ブロック	
・ 章の扉	52
・ 調査結果, 考察とまとめ	53

令和2年3月

第19次共同研究担当者会議

指定都市教育研究所連盟第 19 次共同研究全体計画

指定都市教育研究所連盟による共同研究は、昭和 38 年に第 1 次共同研究がスタートし、各次共同研究では、都市に暮らす子供たちの実態把握を通して、その時々々の教育課題を解明し、学校・家庭・地域社会における教育の在り方や子供たちとの関わり方などについて提言してきた。そこで、第 19 次共同研究では、主題及び研究内容を次のように設定する。

1 研究主題

これからの社会を創り出していく子供たちの姿や思いに迫る —今日的な教育課題に視点を当てて—

2 主題設定の理由

これまで私たちは、それぞれの時代の中で提起された教育課題を柱に子供たちの姿や思いを探り、その時代における教育課題の解決に向け、提言を行ってきた。第 16 次共同研究（平成 21～23 年度）では、経年比較を通して子供たちの姿や思いの変化の様子（変わったもの・変わらないもの）を把握し、学校・家庭・地域社会における子供たちの生活、学習についての姿や思いを把握することを主たる目的とした。第 17 次共同研究（平成 24～26 年度）では、経年比較を重視して子供たちの変化を追うと同時に、今日的な教育課題である「情報化の進展に伴うモラルの在り方」や「社会や人との関係性の希薄化」などについての設問を加えることで、現代の子供たちが抱える課題を明らかにした。第 18 次共同研究（平成 27～29 年度）では、今日的な教育課題である「主体的な学び」や「自己有用感」などについての設問を加え調査したことにより、学校・家庭・地域社会がより連携・協働しながら子供たちを育てていく重要性について明らかにした。

51 年間に及ぶ過去の共同研究の成果を踏まえながら、教育諸課題に視点を当て、時代の変化に対応した調査問題を作成し、子供たちのよりよい成長のための学校・家庭・地域社会の在り方を提言していきたいと考え、本主題を設定した。

3 研究の内容

(1)平成 29 年告示の新学習指導要領解説では、「社会に開かれた教育課程」に主眼を置き、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会とが共有し（中略）、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていく」ことが強調されている。また、「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、（中略）、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる」と記されている。

そこで、第 19 次共同研究では、第 17、18 次共同研究の成果を踏まえ、「社会に開かれた教育課程」や「主体的・対話的で深い学び」等にも視点を当てて分析を行い、学校・家庭・地域社会と子供たちの生活や学習の関わり方の状況を把握することを主たる目的とする。

(2)設問はできるだけ客観的事実として提示できるものとし、選択肢は時間・程度・有無、あるいは内容を設定するなど比較しやすいものにする。原則として、調査問題は第 18 次共同研究の設問を引き継ぎ、過去の設問の内容、時代の変化に合わなくなったものや変化や相関が低いものについて見直す。そのため、第 18 次共同研究の調査問題については、十分精査するものとする。

(3)第 19 次の共同研究において、経年比較により指定都市の子供の実態を把握し、学校・家庭・地域社会における教育の在り方や子供たちとの関わり方などの提言をすることができるような内容とする。

4 研究の方法

(1)調査方法：質問紙法による実態および意識調査

(2)調査対象：20 指定都市に在籍する小学校4年生，6年生，中学校2年生

(3)サンプル数：一学年あたり8,000人（一都市あたり400人以上），全体24,000人（同1,200人以上）

5 調査の観点と分担

研究の内容及び方法に沿って，次の4観点を設定し，各ブロックで分担して研究を進める。

章	観点		ブロック分担	設問数
1	家庭・ 地域社会	家庭・地域社会における生活	東ブロック	12
2		家庭・地域社会における学習	西ブロック	13
3	学校	学校における生活	南ブロック	13
4		学校における学習	北ブロック	12

6 研究の流れ

【1年次（平成30年度）】

計画の立案，調査方法の共通理解，観点の捉え（各章の扉）作成，調査問題の検討，分析の視点作成，調査問題原案とりまとめ

【2年次（令和元年度）】

調査問題の確定，データ分析についての共通理解，刊行物の体裁の確定

単純集計結果公表についての共通理解，調査実施とデータ分析，観点の捉え（各章の扉）確定

設問ごとの調査結果作成，各章の考察とまとめ作成

【3年次（令和2年度）】

観点の捉え（各章の扉）・設問ごとの調査結果・各章の考察とまとめについて確認

序章・終章の作成，最終稿確定，第20次共同研究についての共通理解，概要版作成

* 以上の内容は，第1回担当者会議（仙台市：平成30年5月）で作成し，所長との合同協議会において報告したものを，第3回担当者会議（札幌市：令和元年5月）において修正，加筆したものです。

令和元年度の活動概要

- 5月29日(水)～31日(金)：第3回全体会議(札幌市)
 - ・調査問題の確定と調査の集計方法の確認
 - ・原稿作成方法の確認
 - ・単純集計結果の公表についての確認(内容・方法)
- ※所長との合同協議会
 - ・調査問題及び調査実施, 単純集計結果の公表についての決裁
- 7月～9月：各都市
 - ・調査実施
- 10～11月：ブロック会議(各ブロックの都市)
 - ・ブロックごとのデータ分析, 報告書の内容構成案作成・検討
- 12月4日(水)～6日(金)：第4回全体会議(堺市)
 - ・データ分析及びブロックごとの執筆内容の確認
 - ・単純集計結果公表準備
 - ・第20次共同研究の在り方について
- 1～3月：第2回ブロック推進委員会議
※メールにて行う
 - ・年次報告書の作成
- 3月：「年次報告書」として全都市へ送付(事務局→全都市)

令和2年度の見通し

- 5月27日(水)～29日(金)：第5回全体会議(熊本市)
 - ・第19次刊行物原稿確認
 - ・第19次概要版の提案
 - ・第20次の方針の提案
- ※所長との合同協議会
 - ・概要版の作成, 第20次の方針についての決裁
- 10月：熊本市
 - ・原稿の校正
 - ・概要版の検討
 - ・第20次共同研究(案)の検討
- 12月：第6回担当者会議：大阪市
 - ・刊行物, 概要版の確定
 - ・第20次共同研究(案)の検討
- 12月：各都市
 - ・刊行物, 概要版の決裁
- 3月：熊本市
 - ・刊行物の発行及び発送

令和元年度（第2年次）共同研究担当者名簿（◎委員長 ○副委員長 ※ブロック推進委員）

NO.	機関名	職名	氏名
1	札幌市教育センター	指導主事	○牧野 宜英 ※阿久津 誠
2	仙台市教育センター	指導主事	◎今野 透 鈴木 修一郎
3	さいたま市立教育研究所	指導主事	沼 良
4	千葉市教育センター	主任指導主事	大川 修一
5	川崎市総合教育センター	指導主事	望月 隆
6	横浜市教育センター	首席指導主事	丹羽 正昇
7	相模原市教育センター	指導主事	島田 真人
8	新潟市立総合教育センター	指導主事	稲葉 康宣
9	静岡市教育センター	指導主事	※小笠原 忠幸
10	浜松市教育センター	指導主事	武田 玲子
11	名古屋市教育センター	指導主事	大塚 武雄 安武 宏
12	京都市総合教育センター	首席指導主事	牧野 雅彦
13	大阪市教育センター	指導主事	石田 かおり
14	堺市教育委員会教育センター	指導主事	○※品川 隆一
15	神戸市総合教育センター	担当係長	高原 良幸
16	岡山市教育研究研修センター	指導副主査	松岡 孝佳
17	広島市教育センター	指導主事	※北谷 一水
18	北九州市立教育センター	指導主事	高田 鋼太郎
19	福岡市教育センター	指導主事	鞭馬 あゆみ
20	熊本市教育センター	指導主事	沖田 史佳

第1章

家庭・地域社会における生活

本章では、「家庭における基本的な生活」「家族との関わり」「地域社会との関わり」の三つの切り口から、子供たちの家庭や地域社会での生活の現状と学校での学習や生活がどのように関係しているのかを探っていきます。

そして、社会全体で教育の向上に取り組むために、学校と家庭・地域社会がどのように連携し、協力していけばよいかについて提言します。

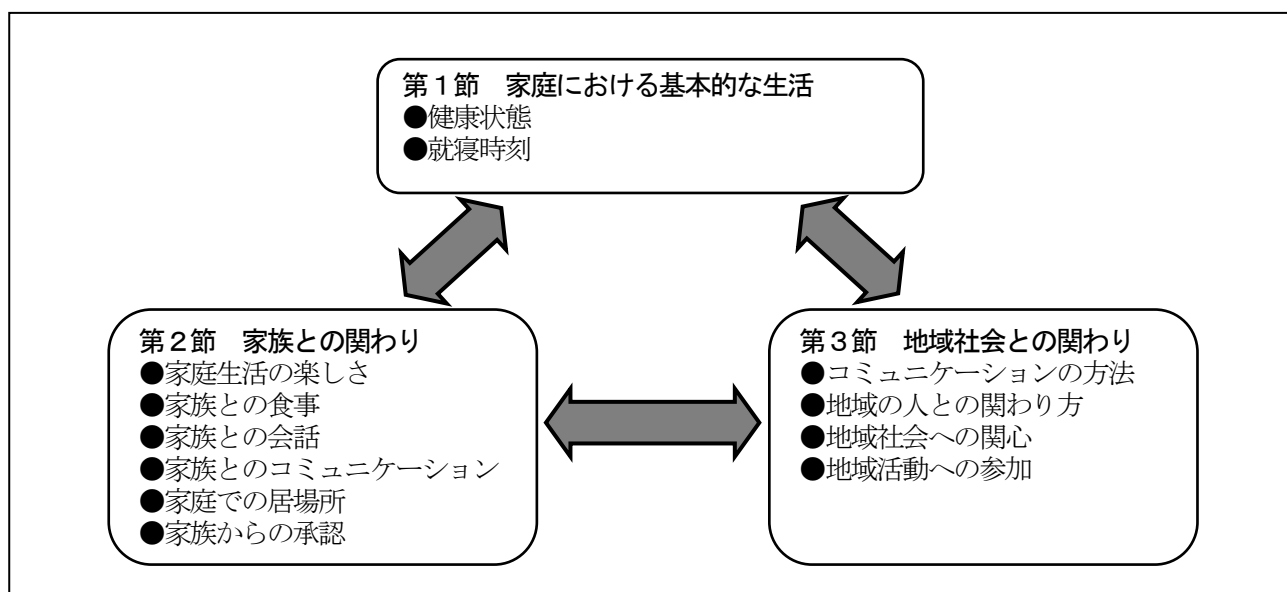
平成29年3月に告示された学習指導要領の前文では、これからの学校に求められることとして、一人一人の子供が、自分のよさや可能性を認識できる自己肯定感を育むなど、持続可能な社会の創り手となることができるように示されている。また、これからの時代に求められる教育を実現するために、「社会に開かれた教育課程」の重要性が明記された。「社会に開かれた教育課程」とは“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育むような教育課程を実現しようとする理念のことである。

第18次の調査結果では、積極的に地域活動に参加している子供は、地域社会から学ぶ楽しさやその意義を感じ取っていることがわかった。また、家庭でコミュニケーションを図る機会や子供を認め励ます機会を増やしていくことが、子供の自己肯定感を高めることにつながる事が明らかになった。

そこで、本章では、これらのことを受け、家庭・地域社会における生活の実態を明らかにするとともに、家庭・地域社会における生活と子供の学びがどのように関係しているかを探ることが重要であると考え、設問を設定した。

本章の構成は、これまでの経年変化を考慮し、「家庭における基本的な生活」「家族との関わり」「地域社会との関わり」の三つの切り口を設定している。まず、「家庭における基本的な生活」では、健康状態や就寝時刻など基本的な生活についての実態を継続して探る。次に、「家族との関わり」では、家庭生活の楽しさや家族との食事やコミュニケーション、家庭での居場所、家族からの承認について探る。さらに、「地域社会との関わり」では、友だちや地域の人との関わり方、地域社会への関心や地域活動への参加状況について探る。

分析に当たっては、家庭・地域社会における生活に関する子供たちの実態や意識を明らかにし、「社会に開かれた教育課程」の実現をめざし、学校・家庭・地域社会それぞれの果たす役割と連携や協力の在り方について提言する。



「家庭・地域社会における生活」の調査構造

第1節 家庭における基本的な生活

1-1 健康状態

＜設問1＞あなたは、元気に生活していますか。

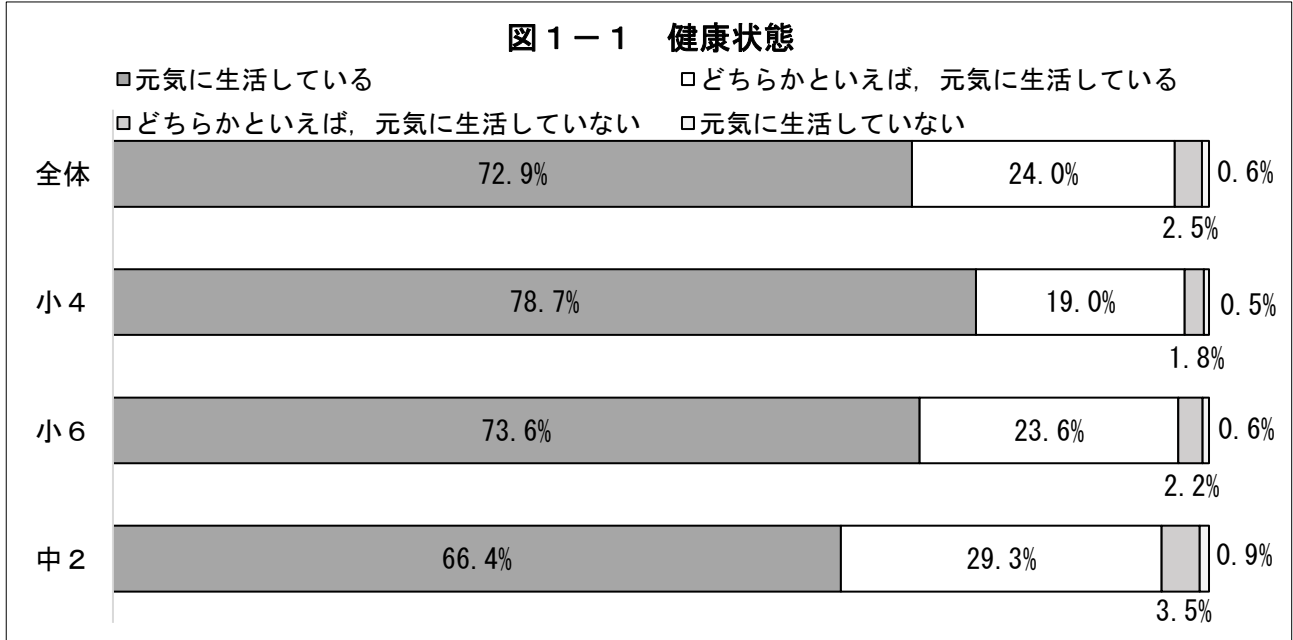


図1-1は、＜設問1＞の集計結果である。全体では、健康に関して、「元気に生活している」と回答した割合は、72.9%で最も高い。また、「元気に生活していない」と回答した割合は、0.6%で最も低い。

学年別では、「元気に生活している」と回答した割合は小4で78.7%、小6で73.6%、中2で66.4%となっており、学年が進むにつれて減少している。一方、「どちらかといえば、元気に生活していない」と「元気に生活していない」を合わせた割合は、学年が進むにつれて増加している。小4と小6の割合は0.5ポイントの増加に留まっているが、小4と中2を比較すると約2倍増となっている。

表1-① これまでの調査で「元気に生活している」と回答した割合 (%)

	H22	H25	H28	R1
	67.4	69.1	73.0	72.9

平成22年度、平成25年度、平成28年度の調査と比較すると、学年が進むにつれて減少する傾向は変わらない。しかし、「元気に生活している」と回答した割合は、この10年間で5.5ポイントの増加となっている（表1-①）。

○ 健康状態と家族からの承認との関連

表1-1は、本設問と＜家族からの承認：設問8＞をクロス集計した結果である。

「元気に生活している」と回答した子供の89.3%が、家族からほめられたことが「よくある」または「ときどきある」と回答している。

「どちらかといえば、元気に生活している」と回答した子供の76.4%が、家族からほめられたことが「よくある」または「ときどきある」と回答している。

一方、「どちらかといえば、元気に生活していない」または「元気に生活していない」と回答した子供の43.9%が、「ほめられたことがまったくない」と回答している。

表1-1 健康状態と家族からの承認との関連 (%)

設問1 \ 設問8	設問8			
	ほめられたことがよくある	ほめられたことがときどきある	ほめられたことがあまりない	ほめられたことがまったくない
元気に生活している	47.6	41.7	8.8	1.9
どちらかといえば、元気に生活している	24.7	51.7	19.7	3.9
どちらかといえば、元気に生活していない	15.4	40.1	30.6	14.0
元気に生活していない	15.0	25.7	29.4	29.9

1-2 就寝時刻

<設問2>あなたは、次の日に学校があるとき、だいたい何時ごろまでに寝ますか。

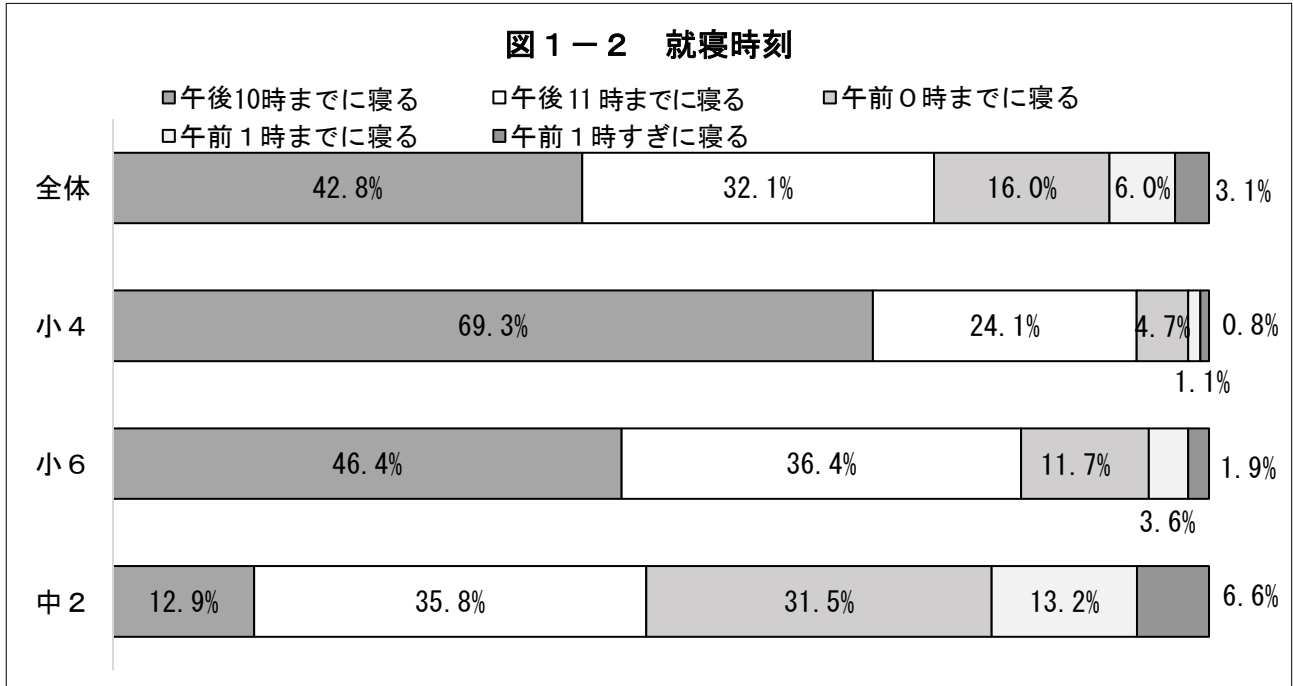


図1-2は、<設問2>の集計結果である。全体では、就寝時刻が「午後10時まで」と回答した割合は、42.8%で最も高い。また、「午前1時までに寝る」または「午前1時すぎに寝る」と回答した割合は、9.1%である。

学年別では、小4の69.3%が「午後10時までに寝る」と回答しているのに対して、小6は46.4%、中2は12.9%となっている。また、中2では「午後11時までに寝る」と「午前0時までに寝る」と回答した割合が、67.3%となっている。

平成22年度、平成25年度、平成28年度の調査と比較すると、就寝時刻が「午後10時まで」と「午後11時まで」とを合わせた割合は、75%程度で推移している（表1-②）。

表1-② これまでの調査で「午後10時まで」「午後11時まで」と回答した割合 (%)

	H22	H25	H28	R1
	76.8	73.4	75.8	74.9

○ 就寝時刻と学習への取組の現状との関連

表1-2は、本設問と<学習への取組の現状：設問47>をクロス集計した結果である。

就寝時刻が「午後10時まで」と回答している子供の89.1%が、学習に「進んで取り組んでいると思う」または「どちらかといえば、進んで取り組んでいると思う」と回答している。

一方、「午前1時まで」と回答している子供の8.2%、「午前1時すぎ」と回答している子供の18.7%が、学習に「進んで取り組んでいると思わない」と回答している。

表1-2 就寝時刻と学習への取組の現状との関連 (%)

設問2	設問47			
	進んで取り組んでいると思う	どちらかといえば、進んで取り組んでいると思う	どちらかといえば、進んで取り組んでいると思わない	進んで取り組んでいると思わない
午後10時まで	45.6	43.5	8.8	2.1
午後11時まで	34.4	49.6	12.8	3.1
午前0時まで	28.5	50.2	16.2	5.1
午前1時まで	23.5	44.7	23.6	8.2
午前1時すぎ	16.8	37.0	27.5	18.7

第2節 家族との関わり

1-3 家庭生活の楽しさ

<設問3>あなたは、家での生活が楽しいですか。

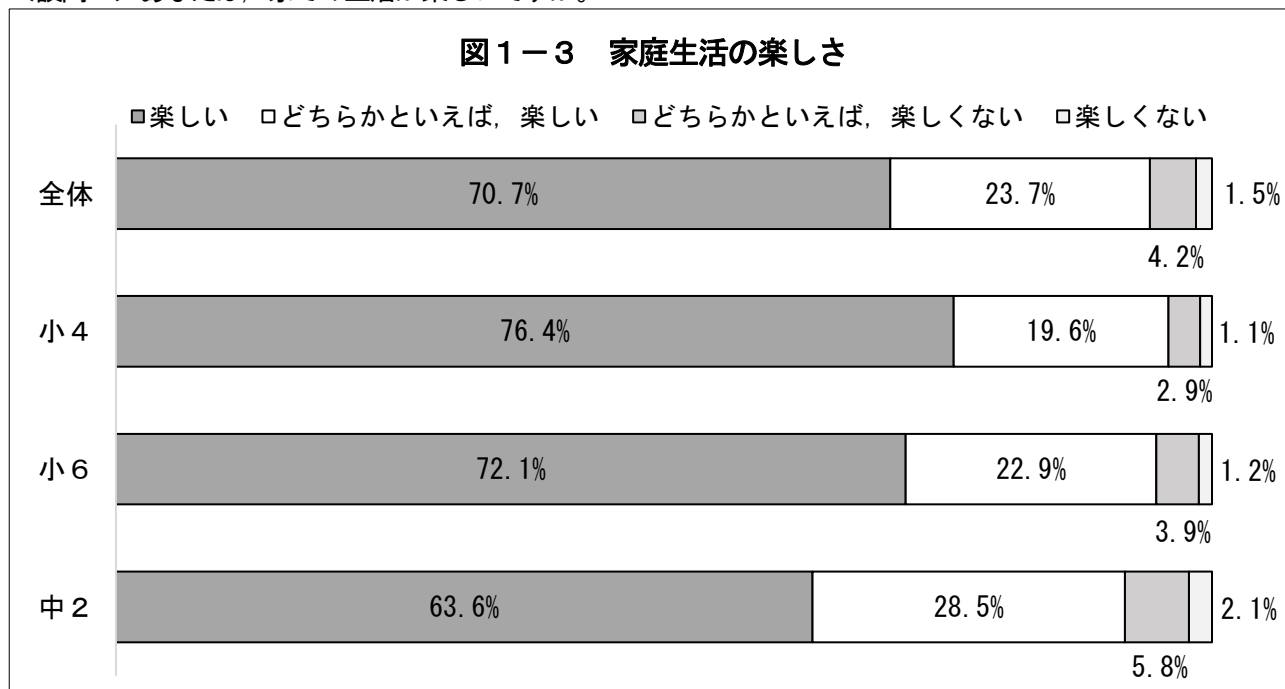


図1-3は、<設問3>の集計結果である。全体では、家での生活が「楽しい」と回答した割合は、70.7%で最も高い。「どちらかといえば、楽しい」と回答した割合の23.7%を合わせると、94.4%の子供が肯定的な回答をしている。また、「どちらかといえば、楽しくない」と「楽しくない」を合わせると、5.7%となっている。

学年別では、家庭生活が「楽しい」と回答した割合が小4で76.4%、小6で72.1%、中2で63.6%となっており、学年が進むにつれて「楽しい」と回答した割合は減少している。中2においては、「どちらかといえば、楽しくない」と「楽しくない」と回答した割合を合わせると、7.9%の子供が否定的な回答をしている。

表1-③ これまでの調査で「楽しい」と回答した割合 (%)

	H22	H25	H28	R1
割合 (%)	64.8	65.2	67.7	70.7

平成22年度、平成25年度、平成28年度の調査と比較すると、学年が進むにつれて、家での生活が「楽しい」と回答した割合が減少する傾向は変わらない。しかし、「楽しい」と回答した割合は、年々増加傾向にある(表1-③)。

○ 家庭生活の楽しさと家族とのコミュニケーションとの関連

表1-3は、本設問と<家族とのコミュニケーション：設問6>をクロス集計した結果である。

家庭生活が「楽しい」と回答した子供の38.5%が、家族と「よく相談する」と回答している。「ときどき相談する」と回答した37.2%と合わせると、家庭生活が「楽しい」と回答した子供の75.7%が、家族と「よく相談する」または「ときどき相談する」と回答している。

一方、家庭生活が「楽しくない」と回答した子供の55.5%が、家族と「まったく相談しない」と回答している。

表1-3 家庭生活の楽しさと家族とのコミュニケーションとの関連 (%)

設問3 \ 設問6	よく相談する	ときどき相談する	あまり相談しない	まったく相談しない
楽しい	38.5	37.2	17.7	6.5
どちらかといえば、楽しい	15.1	37.4	34.1	13.4
どちらかといえば、楽しくない	9.5	24.7	34.9	30.8
楽しくない	8.3	12.9	23.3	55.5

1-4 家族との食事

<設問4>あなたは、家の人と食事をしていますか。

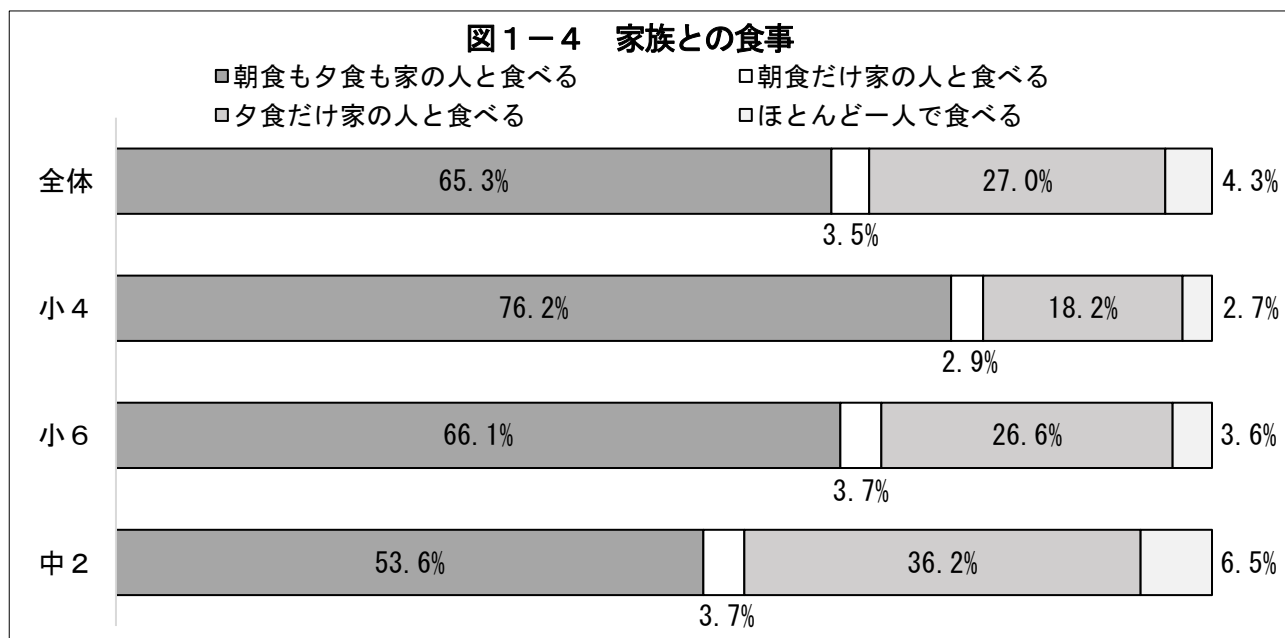


図1-4は、<設問4>の集計結果である。全体では、「朝食も夕食も家の人と食べる」と回答した割合が、65.3%で最も高い。続いて「夕食だけ家の人と食べる」が27.0%である。「朝食だけ家の人と食べる」は、3.5%であり、「ほとんど一人で食べる」と回答した割合の4.3%よりもさらに低い割合であった。

学年別では、「朝食も夕食も家の人と食べる」と回答した割合は、小4で76.2%、小6で66.1%、中2で53.6%となっており、学年が進むにつれて減少している。

平成25年度、平成28年度の調査と比較すると「朝食も夕食も家の人と食べる」と回答した割合は、平成25年度からほぼ変化なく推移している(表1-④)。

表1-④ これまでの調査で「朝食も夕食も家の人と食べる」と回答した割合(%)

	H25	H28	R1
割合(%)	65.1	64.1	65.3

○ 家族との食事と家族とのコミュニケーションとの関連

表1-4は、本設問と<家族とのコミュニケーション：設問6>をクロス集計した結果である。

「朝食も夕食も家の人と食べる」と回答した子供の36.7%が、家族と「よく相談する」と回答している。「ときどき相談する」と回答した37.0%と合わせると、「朝食も夕食も家の人と食べる」と回答した子供の73.7%が、家族と「よく相談する」または「ときどき相談する」と回答している。

一方、「ほとんど一人で食べる」と回答した子供の58.8%が、家族と「まったく相談しない」または「あまり相談しない」と回答している。

表1-4 家族との食事と家族とのコミュニケーションとの関連(%)

設問4 \ 設問6	よく相談する	ときどき相談する	あまり相談しない	まったく相談しない
朝食も夕食も家の人と食べる	36.7	37.0	19.1	7.3
朝食だけ家の人と食べる	23.9	35.6	29.3	11.2
夕食だけ家の人と食べる	22.0	36.5	28.4	13.1
ほとんど一人で食べる	13.8	27.4	30.2	28.6

1-5 家族との会話

<設問5>あなたは、家の人と、毎日の生活のことや学校のことなどについて話をしていますか。

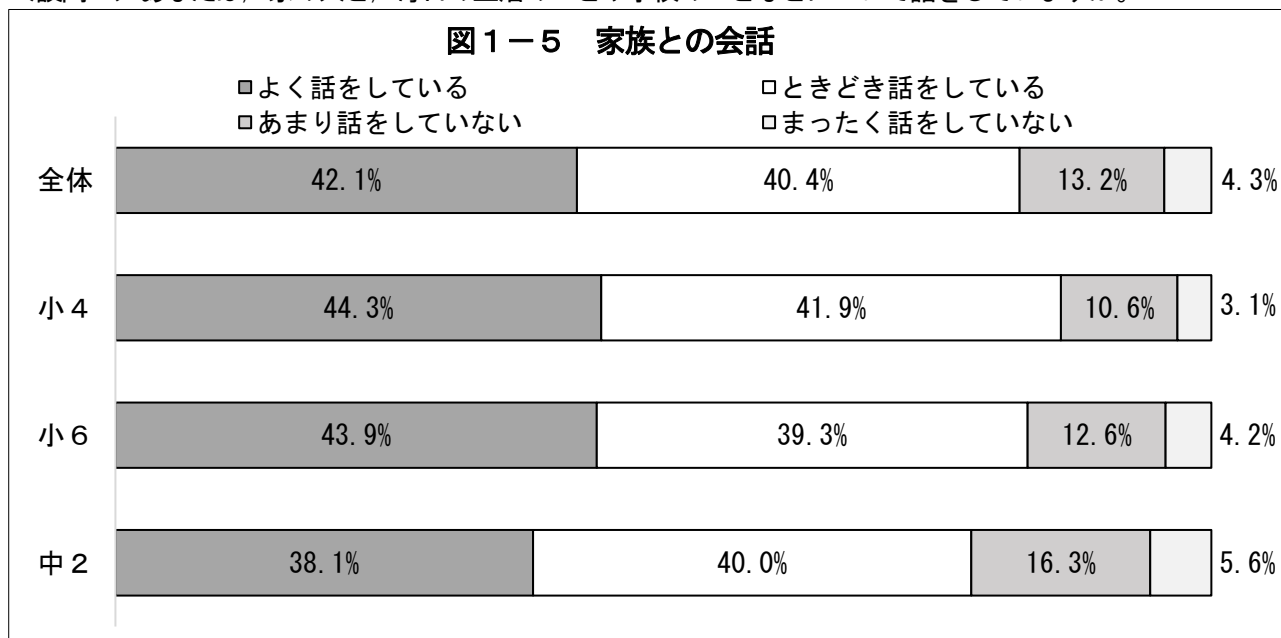


図1-5は、<設問5>の集計結果である。全体では、家の人と「よく話している」または「ときどき話している」と回答した割合を合わせると、82.5%である。また、「まったく話をしていない」と回答した割合は、4.3%である。

学年別では、家の人と「よく話している」と回答した割合は小4で44.3%、小6で43.9%、中2で38.1%となっており、学年が進むにつれて減少している。一方、家の人と「まったく話をしていない」と回答した割合は小4で3.1%、小6で4.2%、中2で5.6%と、学年が進むにつれて増加している。

平成22年度、平成25年度、平成28年度の調査と比較すると、家の人と「よく話している」と回答した割合が、小学校段階から中学校段階に進むにつれて減少する傾向は変わらない。また、「よく話している」と回答した全体の割合は、令和元年度では減少している(表1-⑤)。

表1-⑤ これまでの調査で「よく話している」と回答した割合(%)
(H25から設問と選択肢を修正して実施)

	H22	H25	H28	R1
	35.0	41.0	43.4	42.1

○ 家族との会話と自己有用感との関連

表1-5は、本設問と<自己有用感：設問37>をクロス集計した結果である。

家の人と「よく話している」と回答した子供の82.8%が、学校生活の中で、誰かの役に立ったと思うことが「よくある」または「ときどきある」と回答している。

一方、家の人と「まったく話をしていない」と回答した子供の59.2%が、学校生活の中で、誰かの役に立ったと思うことが「あまりない」または「まったくない」と回答している。

表1-5 家族との会話と自己有用感との関連(%)

設問5 \ 設問37	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
よく話している	32.4	50.4	14.1	3.2
ときどき話している	17.2	54.1	23.4	5.3
あまり話をしていない	12.7	42.1	33.7	11.5
まったく話をしていない	13.3	27.5	29.4	29.8

1-6 家族とのコミュニケーション

<設問6>あなたは、困ったり悩んだりしたときに、家の人と相談しますか。

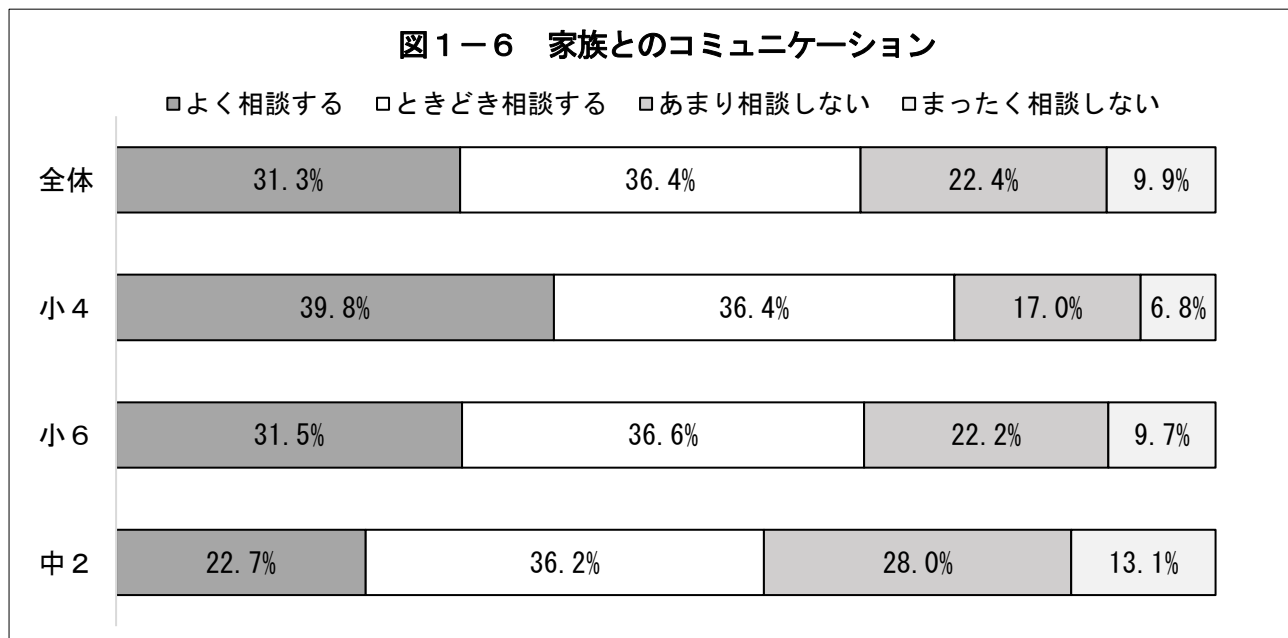


図1-6は、<設問6>の集計結果である。全体では、家の人と「よく相談する」または「ときどき相談する」と回答した割合を合わせると67.7%である。反対に「まったく相談しない」と回答した割合は、9.9%である。学年別では、「よく相談する」と回答した割合は小4で39.8%、小6で31.5%、中2で22.7%となっており、学年が進むにつれて減少している。

表1-6 これまでの調査で「よく相談する」「ときどき相談する」と回答した割合(%)

平成28年度の調査と比較すると、家の人と「よく相談する」または「ときどき相談する」と回答した全体の割合は1.5ポイント増加している(表1-6)。「よく相談する」または「ときどき相談する」と回答した割合が、学年が進むにつれて減少する傾向は変わらない。

	H28	R1
	66.2	67.7

○ 家族とのコミュニケーションと家庭での居場所との関連

表1-6は、本設問と<家庭での居場所：設問7>をクロス集計した結果である。

表1-6を見ると、「よく相談する」と回答した子供の87.5%が、「ほっとする」と回答している。「どちらかといえばほっとする」と回答した10.7%を加えると、困ったり悩んだりしたときに、家の人と相談する子供の98.2%が、「ほっとする」または「どちらかといえば、ほっとする」と回答している。

一方、困ったり悩んだりしたときに、家の人と「まったく相談しない」と回答した子供の10.7%が、「ほっとしない」と回答している。また、「どちらかといえばほっとしない」と回答した12.2%を加えると、家の人と相談しないと回答した子供の22.9%が、「ほっとしない」「どちらかといえば、ほっとしない」と回答している。

表1-6 家族とのコミュニケーションと家庭での居場所(%)

設問6 \ 設問7	設問7			
	ほっとする	どちらかといえば、ほっとする	どちらかといえば、ほっとしない	ほっとしない
よく相談する	87.5	10.7	1.2	0.6
ときどき相談する	72.7	23.9	2.6	0.7
あまり相談しない	55.2	35.5	6.9	2.4
まったく相談しない	45.6	31.5	12.2	10.7

1-7 家庭での居場所

<設問7>あなたは、家においてほっとしますか。(心が落ち着きますか。)

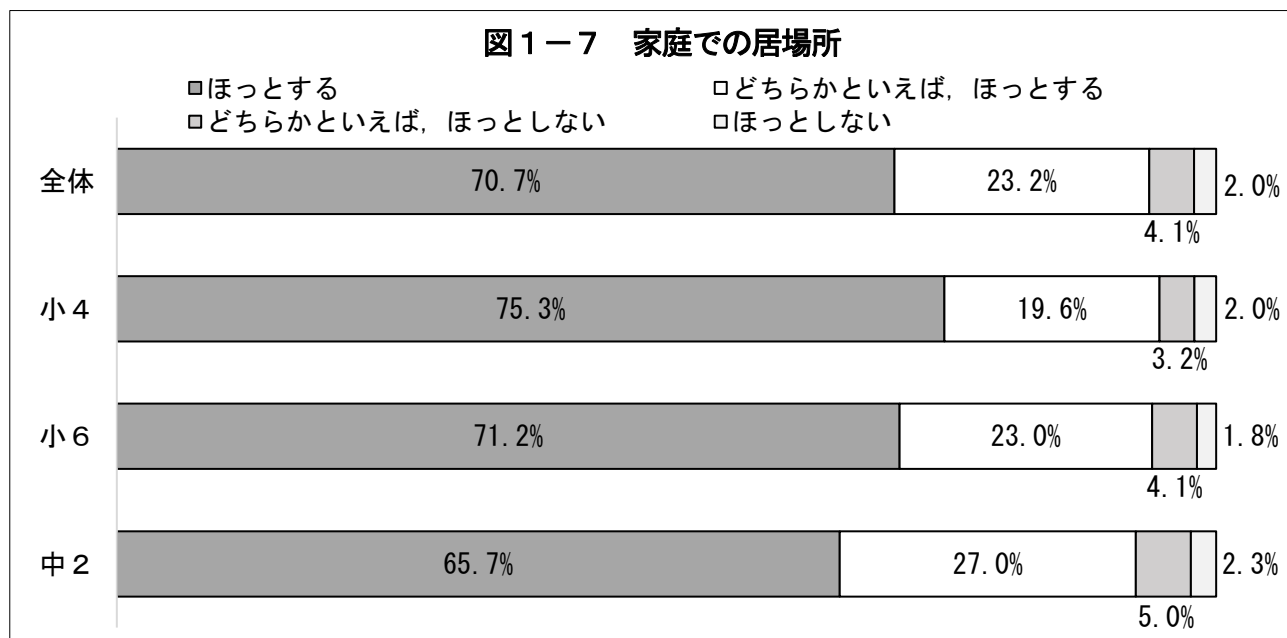


図1-7は、<設問7>の集計結果である。全体では、家において「ほっとする」と回答した割合は、70.7%で最も高い。「どちらかといえば、ほっとする」と回答した23.2%を加えると、93.9%の子供が、「ほっとする」「どちらかといえば、ほっとする」と回答している。また、「ほっとしない」と回答した割合は、2.0%である。

また、学年別では「ほっとする」「どちらかといえば、ほっとする」と回答した割合の合計は、小4で94.9%、小6で94.2%、中2で92.7%となっており、どの学年も90%以上である。

平成28年度の調査と比較すると、全体で「ほっとする」と回答した割合が、学年が進むにつれて減少する傾向は変わらない。

しかし、平成28年度から令和元年度では、全体で「ほっとする」と回答した割合が、10.3ポイント増加している(表1-⑦)。

表1-⑦ これまでの調査で「ほっとする」と回答した割合(%)
(H28から設問を修正して実施)

	H28	R1
割合(%)	60.4	70.7

○ 家庭での居場所と家族からの承認

表1-7は、本設問と<家族からの承認：設問8>をクロス集計した結果である。

表1-7を見ると、家において「ほっとする」と回答した子供の50.2%が、家の人にほめられたことが「よくある」と回答している。「ときどきある」と回答した41.2%を加えると、91.4%が家の人にほめられたことが、「よくある」または「ときどきある」と回答している。

一方、「ほっとしない」と回答した子供の27.4%が、家の人にほめられたことが「まったくない」と回答している。

「あまりない」と回答した37.1%を加えると、64.5%が家の人にほめられたことが「まったくない」または「あまりない」と回答している。

表1-7 家庭での居場所と家族からの承認との関連(%)

設問7 \ 設問8	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
ほっとする	50.2	41.2	7.2	1.4
どちらかといえば、ほっとする	21.5	54.9	20.0	3.6
どちらかといえば、ほっとしない	11.1	39.2	38.4	11.3
ほっとしない	8.3	27.2	37.1	27.4

1-8 家族からの承認

＜設問8＞あなたは、家の人から「すごいね」「がんばっているね」などとほめられたことがありますか。

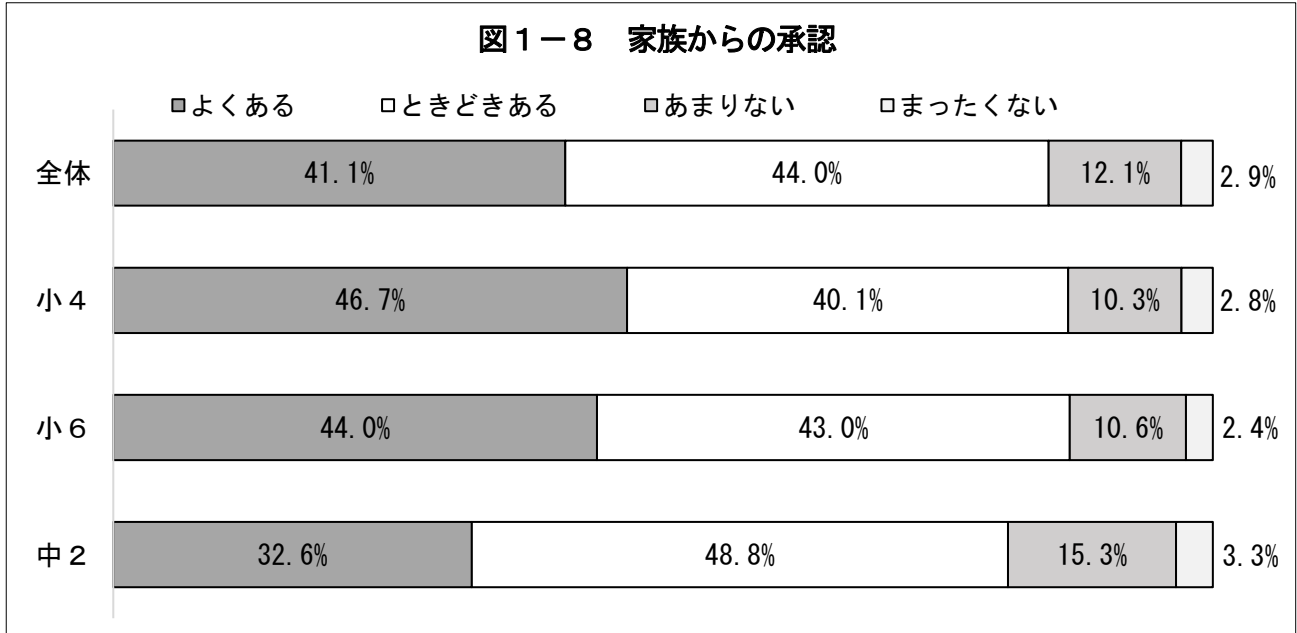


図1-8は、＜設問8＞の集計結果である。全体では、家の人からほめられることが「よくある」または「ときどきある」と回答した割合を合わせると、85.1%である。また、「まったくない」と回答した割合は、2.9%である。

学年別では、「よくある」または「ときどきある」と回答した割合を合わせると、小4で86.8%、小6で87.0%、中2で81.4%となっており、小4や小6と比較して中2では低くなっている。なお、中2においては、「あまりない」または「まったくない」と回答した割合が18.6%である。

表1-⑧ これまでの調査で「よくある」「ときどきある」と回答した割合(%)
(H28から設問を修正して実施)

	H28	R1
	81.7	85.1

平成28年度の調査と比較すると、全体では、家の人からほめられることが「よくある」または「ときどきある」と回答した子供の割合は3.4ポイント増加している(表1-⑧)。

○ 家族からの承認と家族との会話の関連

表1-8は、本設問と＜家族との会話：設問5＞をクロス集計した結果である。

家族からほめられたことが「よくある」と回答した子供の60.8%が、「よく話をしている」と回答している。家族からほめられたことが「ときどきある」と回答した32.3%を加えると、家族からの承認を感じている子供の93.1%が、「よく話をしている」と回答している。

一方、家族からほめられたことが「まったくない」と回答した子供の33.5%が、家族と「まったく話をしていない」と回答している。「あまり話をしていない」と回答した子供の26.9%を合わせると、60.4%が家族と「まったく話をしていない」または「あまり話をしていない」と回答している。

表1-8 家族からの承認と家族との会話の関連(%)

設問8 \ 設問5	設問5			
	よく話をしている	ときどき話をしている	あまり話をしていない	まったく話をしていない
よくある	60.8	32.2	5.5	1.5
ときどきある	32.3	49.0	15.3	3.3
あまりない	20.7	40.6	28.2	10.6
まったくない	14.3	25.4	26.9	33.5

第3節 地域社会との関わり

1-9 コミュニケーションの方法

<設問9>あなたは、友だちに連絡や相談事など伝えたいことがあるとき、どのような方法で伝えることが多いですか。

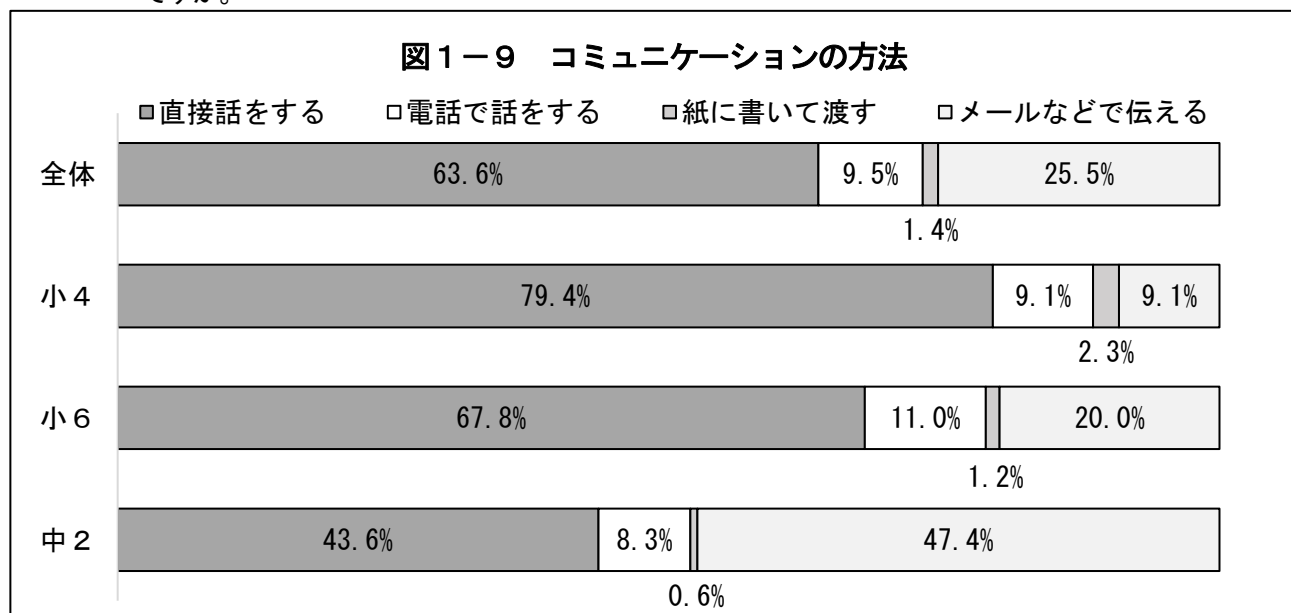


図1-9は、<設問9>の集計結果である。全体では、友だちに伝えたいことがあるとき、「直接話をする」と回答した割合は、63.6%で最も高い。「メールなどで伝える」と回答した割合は25.5%、「電話で話をする」と回答した割合は9.5%、「紙に書いて渡す」と回答した割合は1.4%である。

学年別では、「直接話をする」と回答した割合は小4で79.4%、小6で67.8%、中2で43.6%となっており、学年が進むにつれて減少している。「電話で話をする」と回答した割合は小4で9.1%、小6で11.0%、中2で8.3%と中2が最も低い。「メールなどで伝える」は小4で9.1%、小6で20.0%、中2で47.4%となっており、学年が進むにつれて増加している。

平成25年度、平成28年度と比較すると、学年が進むにつれて「メールなどで伝える」と回答した割合が、増加する傾向は変わらない。平成28年度と令和元年度の「メールなどで伝える」と回答した割合を全体と比較すると、6.6ポイント増加している（表1-9）。

表1-9 これまでの調査で「メールなどで伝える」と回答した割合（%）
（H28は選択肢を修正して実施）

	H25	H28	R1
	17.5	18.9	25.5

○ コミュニケーションの方法と家庭学習における情報機器の有用性との関連

表1-9は、本設問と<家庭学習における情報機器の有用性：設問17>をクロス集計した結果である。友だちに伝えたいことがある時、「メールなどで伝える」と回答した子供の89.8%が、家庭学習における情報機器の有用性について「役立つと思う」または「どちらかといえば、役立つと思う」と回答している。また、「電話で話をする」と回答した84.7%が、「役立つと思う」または「どちらかといえば、役立つと思う」と回答している。

さらに、「直接話をする」と「紙に書いて渡す」と回答した子供も、家庭学習における情報機器の有用性について、肯定的な回答が約80%になっている。

表1-9 コミュニケーションの方法と家庭学習における情報機器の有用性との関連（%）

設問9 \ 設問17	設問17			
	役立つと思う	どちらかといえば、役立つと思う	どちらかといえば、役立つと思わない	役立つとは思わない
直接話をする	45.6	34.2	10.8	9.4
電話で話をする	52.4	32.3	8.6	6.6
紙に書いて渡す	44.7	33.4	11.1	10.8
メールなどで伝える	58.2	31.6	6.9	3.4

1-10 地域の人との関わり方

<設問10>あなたは、普段近所の人とあいさつをしたり、話をしたりしていますか。

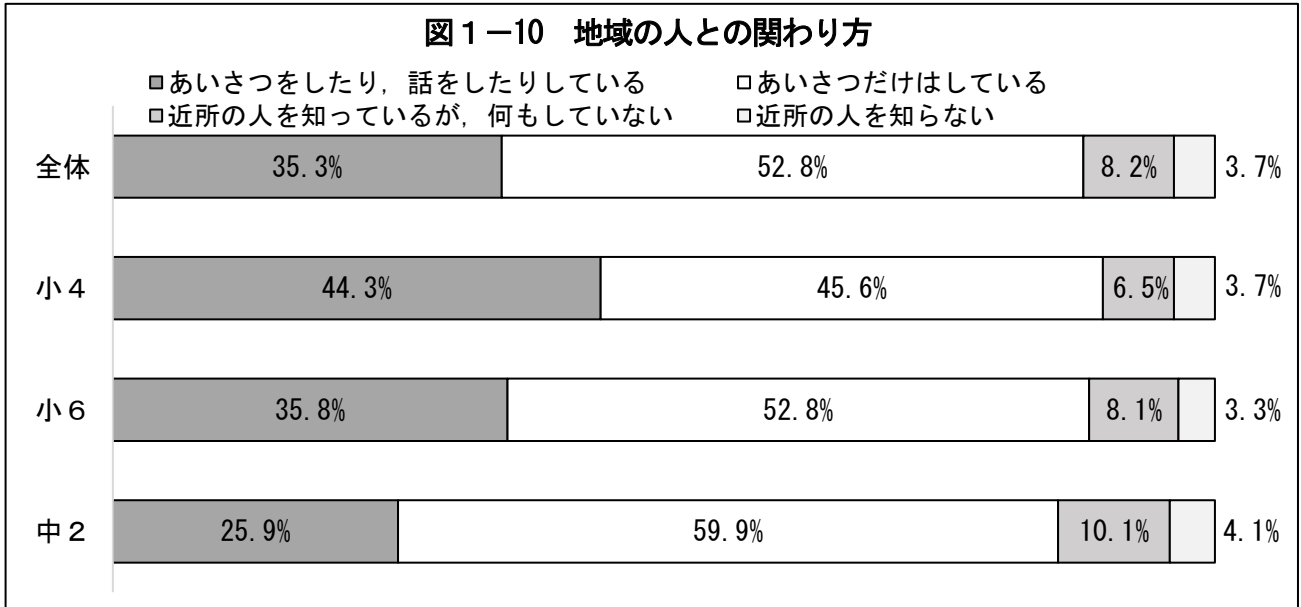


図1-10は、<設問10>の集計結果である。全体では、普段近所の人と「あいさつだけはしている」と回答した割合は52.8%で、最も高い。次に、「あいさつをしたり、話をしたりしている」と回答した割合は35.3%であり、地域の人との関わり方にあいさつを含んだ回答をしている割合は88.1%である。

学年別では、「あいさつをしたり、話をしたりしている」と回答した割合は小4で44.3%、小6で35.8%、中2で25.9%であり、学年が進むにつれて低くなっている。「あいさつだけはしている」と回答した割合は小4で45.6%、小6で52.8%、中2で59.9%と、学年が進むにつれて増加している。

平成22年度、平成25年度、平成28年度と比較すると、「あいさつをしたり、話をしたりしている」と回答した割合は、減少している(表1-10)。

表1-10 これまでの調査で「あいさつをしたり、話をしたりしている」と回答した割合(%)

H22	H25	H28	R1
43.3	39.3	37.3	35.3

○ 地域の人との関わり方と地域の人から学ぶ楽しさとの関連

表1-10は、本設問と<地域の人から学ぶことの楽しさ:設問23>をクロス集計した結果である。

「あいさつをしたり、話をしたりしている」と回答した子供の56.1%が、地域の人から学ぶことを「楽しい」または「どちらかといえば、楽しい」と回答している。

また、「あいさつをしたり、話をしたりしている」「あいさつだけはしている」「近所の人を知っているが何もしていない」「近所の人を知らない」の順で、地域の人から学ぶ楽しさについて、「機会がないから、わからない」と回答した子供の割合が増加している。

表1-10 地域の人との関わり方と地域の人から学ぶことの楽しさとの関連(%)

設問23 \ 設問10	楽しい	どちらかといえば、楽しい	どちらかといえば、楽しくない	楽しくない	機会がないから、わからない
あいさつをしたり、話をしたりしている	31.1	25.0	5.1	1.8	37.1
あいさつだけはしている	14.5	24.9	7.8	2.8	49.9
近所の人を知っているが、何もしていない	9.1	17.3	8.9	6.1	58.6
近所の人を知らない	5.8	13.3	7.1	7.0	66.8

1-11 地域社会への関心

<設問11>あなたは、地域でおきていることや取り組んでいることに関心がありますか。

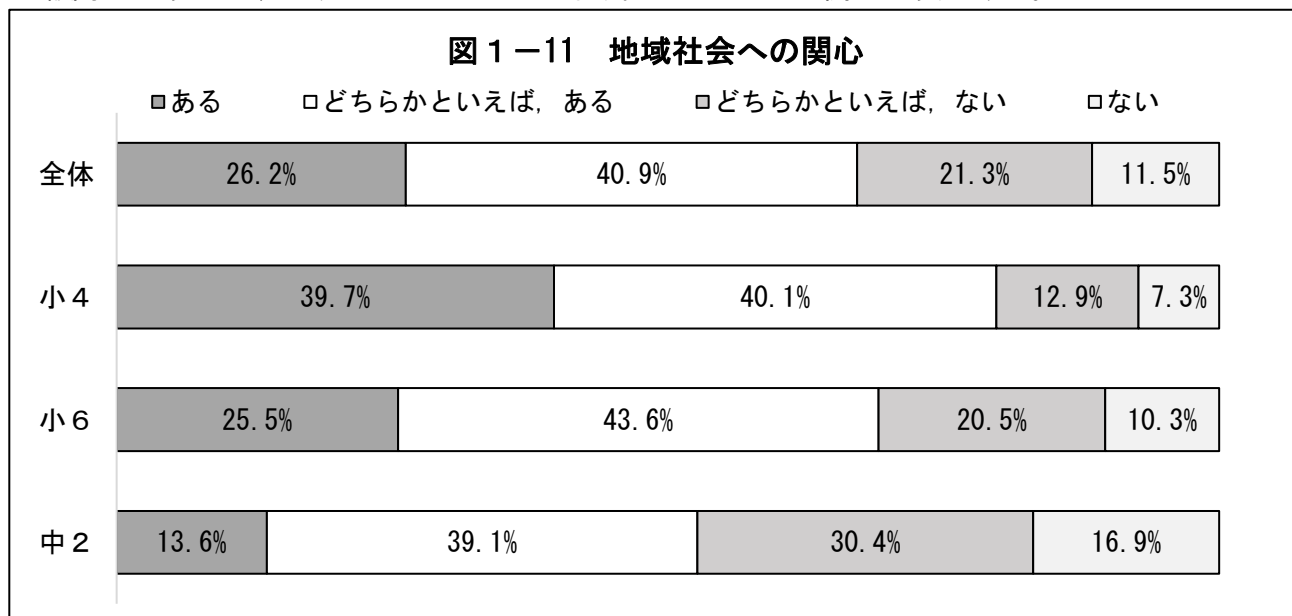


図1-11は、<設問11>の集計結果である。全体では、地域でおきていることや取り組んでいることに関心が「ある」「どちらかといえば、ある」と回答した割合を合わせると67.1%である。また、「ない」と回答した割合は、11.5%である。

学年別では、「ある」と回答した割合は、小4で39.7%、小6で25.5%、中2で13.6%となっており、学年が進むにつれて低くなっている。小4においては、「ない」または「どちらかといえば、ない」と回答した割合を合わせると、20.2%であるが、中2においては、「ない」または「どちらかといえば、ない」と回答した割合を合わせると、47.3%である。

なお、<設問11>は、令和元年度からの調査項目であるため、経年比較ができない。

○ 地域社会への関心と地域の人との関わり方との関連

表1-11は、本設問と<地域の人との関わり方：設問10>をクロス集計した結果である。

地域でおきていることや取り組んでいることに関心が「ある」と回答した子供の55.7%が、普段近所の人と「あいさつをしたり、話をしたりしている」と回答している。「あいさつだけはしている」と回答した39.1%と合わせると、94.8%が地域の人とあいさつをしていると回答している。地域社会への関心が「どちらかといえば、ある」と回答した子供についても、91.7%が地域の人とあいさつをしていると回答している。

一方、地域社会への関心が「ない」と回答した子供の14.0%が、「近所の人を知らない」と回答し、17.8%が「近所の人を知っているが、何もしていない」と回答している。

表1-11 地域社会への関心と地域の人との関わり方との関連 (%)

設問10 \ 設問11	あいさつをしたり、話をしたりしている	あいさつだけはしている	近所の人を知っているが、何もしていない	近所の人を知らない
ある	55.7	39.1	3.7	1.4
どちらかといえばある	34.7	57.0	6.4	1.9
どちらかといえばない	20.9	62.7	12.1	4.3
ない	17.8	50.5	17.8	14.0

1-12 地域活動への参加

<設問12>あなたは、地域の行事や活動（お祭り、レクリエーション、スポーツ、奉仕活動など）に参加していますか。

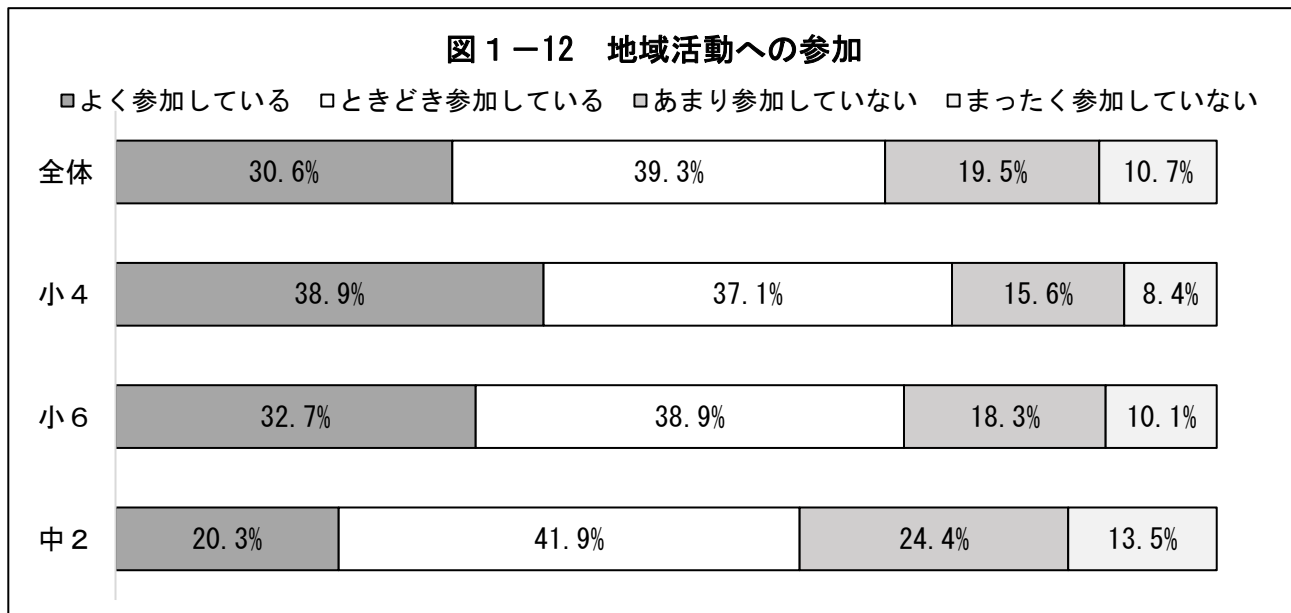


図1-12は、<設問12>の集計結果である。全体では、地域の行事や活動に「よく参加している」と回答した割合は30.6%で、「ときどき参加している」と回答した39.3%と合わせると、69.9%が「参加している」と回答している。また、「あまり参加していない」と回答した割合は、10.7%である。

学年別では、「よく参加している」と回答した割合は、小4で38.9%、小6で32.7%、中2で20.3%となっており、学年が進むにつれて低くなっている。中2においては、「まったく参加していない」または「あまり参加していない」と回答した割合を合わせると、37.9%である。

平成22年度、平成25年度、平成28年度の調査と比較すると、平成25年度まで増加していた「よく参加している」と回答した全体の割合が、平成28年度以降は減少している（表1-12）。

表1-12 これまでの調査で「よく参加している」と回答した割合（%）
（H25から設問を修正して実施）

	H22	H25	H28	R1
よく参加している	29.6	32.9	32.1	30.6

○ 地域活動への参加と行事への参画意識との関連

表1-12は、本設問と<行事への参画意識：設問36>をクロス集計した結果である。

地域の行事や活動に「よく参加している」と回答した子供の56.2%が、学校や学年の行事に「進んで取り組んでいると思う」と回答している。「どちらかといえば、進んで取り組んでいると思う」と回答した36.6%と合わせると、92.8%が学校や学年の行事への参加意識の高い回答をしている。

一方、地域活動に「まったく参加していない」と回答した子供の33.6%が、学校や学年の行事に「進んで取り組んでいると思わない」または「どちらかといえば、進んで取り組んでいると思わない」と回答している。

表1-12 地域活動への参加と行事への参画意識との関連（%）

設問12 \ 設問36	進んで取り組んでいると思う	どちらかといえば、進んで取り組んでいると思う	どちらかといえば、進んで取り組んでいると思わない	進んで取り組んでいると思わない
よく参加している	56.2	36.6	5.8	1.4
ときどき参加している	36.4	51.0	10.8	1.8
あまり参加していない	27.5	50.3	18.1	4.1
まったく参加していない	25.1	41.3	22.3	11.3

家庭・地域社会における生活 考察とまとめ

1 学校は、新しい時代に求められる資質・能力の育成を図っていくために、子供の家庭での生活が充実するよう、家庭と連携・協働していきましょう

平成22年度から令和元年度の子供の「健康状態」の集計結果を見ると、全体では、「元気に生活している」と回答した割合が5ポイント以上増加しており、子供の「健康状態」は上向きであることがわかる(p.6 表1-①)。また、第18次の調査と同様に、元気に生活している子供は、学校生活の中で自分が大切にされているという自己肯定感も高くなる傾向にある。元気に家庭生活を送ることで、子供は、学校においても自信をもって生活し、日々の生活を充実させようとしていることが推察できる(p.6 表1-1)。

一方、「就寝時刻」の集計結果を見ると、全体では、「午後10時までに寝る」と「午後11時までに寝る」の回答を合わせた割合は、平成22年度から75%前後で推移していて、子供の就寝時刻については、それほど大きく変化をしていないことがわかる(p.7 表1-②)。また、「就寝時刻」が比較的早い子供ほど、主体的に学習に取り組む傾向であることがわかる(p.7 表1-2)。

「健康状態」に関して、「元気に生活している」子供の80%以上が、授業中に新たな考えをもったり、考えが深まったりした経験があると回答している(表1-a)。

これらのことから、家庭で「元気に生活している」子供は、学校での学習に主体的な関わりをしたり授業中の考えが深まったりしていることがわかる。学習への主体的な関わりや考えの深まりは、新しい時代に求められる資質・能力の育成につながる。つまり、資質・能力の育成に、子供の家庭での生活が影響していると考えられる。そこで、学校と家庭が連携・協働しながら子供を育ていくことの大切さを、いま一度確認していきたい。

表1-a 健康状態と授業中に考えが深まった経験との関係(%)

設問44 設問1	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
元気に生活している	38.2	45.5	13.8	2.5
どちらかといえば元気に生活している	17.4	50.3	26.3	6.0
どちらかといえば元気に生活していない	11.0	37.0	34.9	17.1
元気に生活していない	16.0	46.3	17.3	4.0

2 学校は、子供が主体的に学習に取り組むために、コミュニケーションを図る機会や、子供を認め励ます機会を増やしていくよう、家庭に啓発していきましょう

家において「ほっとする」と、家庭で安心して生活している子供は、家族からほめられている割合が高い(p.12 表1-7)。また、家族からほめられたことが「よくある」と回答した子供の60.8%が、「よく話をしている」と回答しており、家族から承認されている子供は、家族とよくコミュニケーションを図っていることがわかる(p.13 表1-8)。つまり、家庭で安心して生活している子供は、家族から承認され、家族とのコミュニケーションの機会も多く、家族から大切にされていると感じているのではないかと推察できる。

一方で、「朝食も夕食も家の人と食べる」と回答した子供の73.7%が、家族に相談することが「よくある」または「ときどきある」と回答しており、「家族との食事」が、「家族とのコミュニケーション」の頻度に大きく関係していることがわかる(p.9 表1-4)。さらに、家族と「よく話をしている」と回答した子供の90.2%が、「学習に進んで取り組んでいる」「どちらかといえば学習に進ん

で取り組んでいる」と回答している(表1-b)ことから、「家族との会話」の頻度は、コミュニケーションの機会を増やすだけでなく、子供の主体的な学習への取組につながっていることが推察できる。

また、家庭生活の楽しさと家族とのコミュニケーションの関係を見ると、家庭生活が楽しいと回答している子供の75.7%が「よく相談する」「ときどき相談する」と回答している(p.8 表1-3)。家庭生活に楽しさを感じている子供は、家族とのコミュニケーションが充実しており、学習に進んで取り組もうという主体性が育まれているのではないかと考えられる。

これらのことから、家庭でコミュニケーションが十分に図られ、食事などを通して家庭に居場所があり、家庭での生活が充実している子供は、学校生活において主体的に学習に取り組もうという素地がつくられているのではないかと考える。

そこで、学校は、子供が主体的に学習に取り組むために、コミュニケーションを図る機会や、子供を認め励ます機会を増やしていくよう、家庭に啓発していきたい。

表1-b 家族との会話と学習への取組の現状との関連

設問47 設問5	進んで取り組んでいると思う	どちらかといえば、進んで取り組んでいると思う	どちらかといえば、進んで取り組んでいると思わない	進んで取り組んでいるとは思わない
よく話している	48.7	41.5	7.8	2.0
ときどき話している	31.6	52.0	13.4	3.0
あまり話をしていない	22.4	49.0	22.1	6.4
まったく話をしていない	19.3	34.6	25.4	20.7

3 学校や地域は、子供が地域社会からも学んでいくために、地域の人と積極的に関わることができるよう、連携する機会を多く設定していきましょう

今回の調査で、全ての学年で友だちとの連絡や相談事などにおいて「メールなどで伝える」と回答した割合が増加した。特に中2では、「直接話をする」が減少し、コミュニケーションの方法に変化が見られた(p.14 図1-9)。

地域社会との関わりにおいては、地域の人とあいさつをしたり、話をしたりしている子供の割合は、減少し続けている(p.15 表1-⑩)。しかし、地域社会への関心が高い子供は、地域の人とコミュニケーションをとっていることがわかった(p.16 表1-11)。

また、地域の活動によく参加している子供ほど、学校や学年の行事にも進んで取り組んでいることがわかった(p.17 表1-12)。更に、地域社会への関心が高い子供は、学校で学習していることが、今後の生活にも役に立つと思っていることがわかった(表1-c)。

これらのことから、地域社会への関心が高く、積極的に地域活動へ参加している子供は、学校行事への参加意欲が高く、地域社会から学ぶ楽しさやその意義を感じ取り、学校で学習していることの意義を理解していると考えられる。そこで、学校は地域社会と連携を強め、子供に地域の特長を理解させるとともに、地域活動への参加の機会を更に増やしたり、学校の中で地域の方と関わる場面を意図的につくったりしていきたい。

表1-c 地域社会への関心と考えが深まった経験との関連 (%)

設問49 設問11	役に立つと思う	どちらかといえば、役に立つと思う	どちらかといえば、役に立つと思わない	役に立つと思わない
ある	81.6	15.0	2.4	1.0
どちらかといえば、ある	63.4	31.0	4.5	1.2
どちらかといえば、ない	47.5	37.5	12.3	2.7
どちらかといえば、ない	40.3	30.5	16.6	12.7